

調査の目的・調査期間等

○調査の目的

この基礎調査において実施する、県民を対象としたスポーツに関する意識調査、有識者やスポーツ関係団体等に対するヒアリング調査を通じて、スポーツに関する現状や県民の意識、行政に対する期待、現場における課題等を把握し、愛知県の次期スポーツ推進計画を策定する上での基礎資料とする。

○委託先

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社名古屋

○委託期間

2021年7月15日から2022年1月21日まで

※ 県民を対象としたスポーツに関する意識調査については、民間調査会社の登録モニターを対象としたWebアンケート調査により、2021年12月に実施

主な調査内容

【調査①】県民を対象としたスポーツに関する意識調査

<県内在住の方へのアンケート調査>

- ・県内在住の方2千人に対し、スポーツの実施頻度、スポーツボランティアの活動歴・関心、行政への期待等を把握
- ・回答サンプルの割付については、愛知県の人口構成比に準拠
- ・回答については、現行計画策定時に実施した調査（2010年1月実施）や国の世論調査（スポーツの実施状況等に関する世論調査）との比較・分析を実施

<県内在住の障害のある方へのアンケート調査>

- ・県内在住の障害のある方及びその同居家族等800人に対し、スポーツの実施頻度、スポーツを実施する上での障壁や必要な支援等を把握
- ・回答については、国の世論調査（障害児・者のスポーツライフに関する調査）との比較を実施

【調査②】有識者等へのヒアリング調査

- ・スポーツに関する現状や課題、今後の施策の方向性等を把握
- ・県内大学の学識経験者10名に対して実施

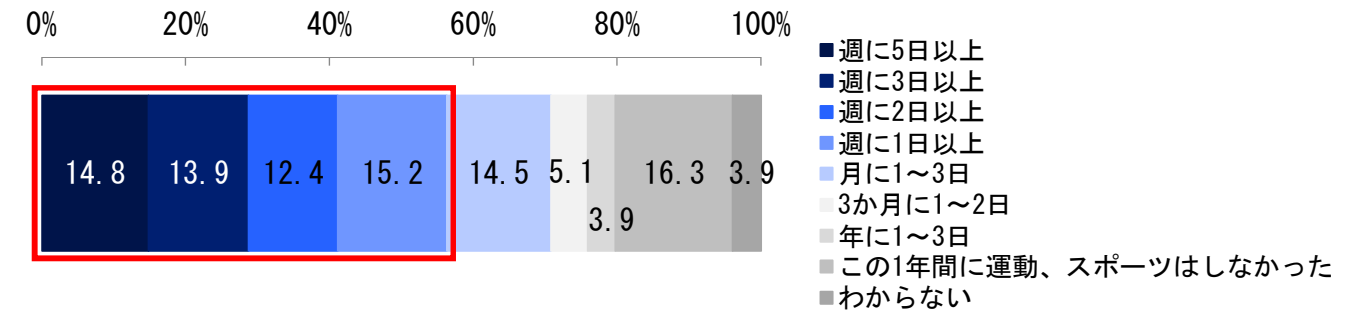
【調査③】スポーツに関する団体、施設等へのヒアリング調査

- ・スポーツに関する現状や課題、現場のニーズを把握するとともに、先進的な調査事例等を把握
- ・スポーツ関係団体、総合型地域スポーツクラブ、大学等10団体に対して実施

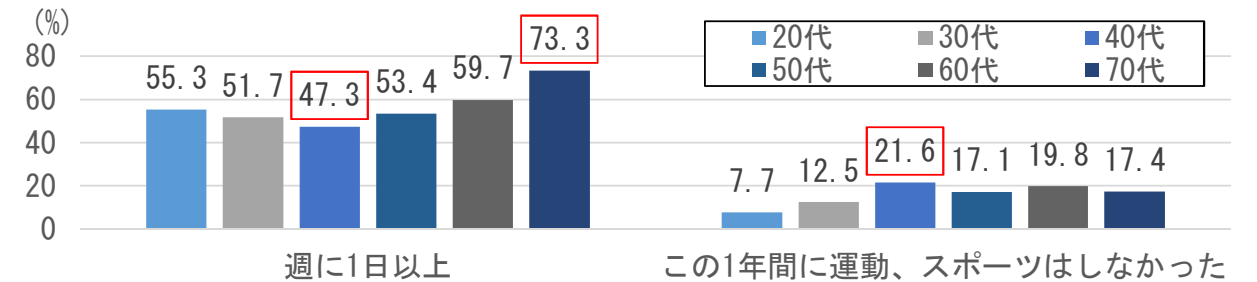
【調査① 県民を対象としたスポーツに関する意識調査】の結果概要

・県民の週に1日以上スポーツ実施率は56.3%と、現行計画の策定時点(45.5%)から10%程度(10.8ポイント)上昇している。また、全国値(56.4%(2021年11月時点))とほぼ同値である。

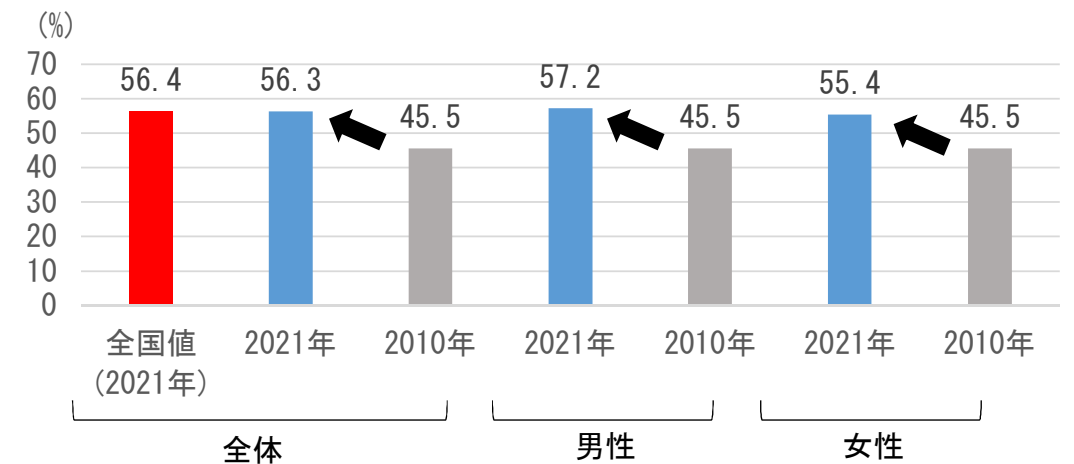
・年代別にみると、週に1日以上の割合は70代が最も高く、40代が最も低い。また、「この1年間に運動、スポーツはしなかった」の割合は40代が最も高い。



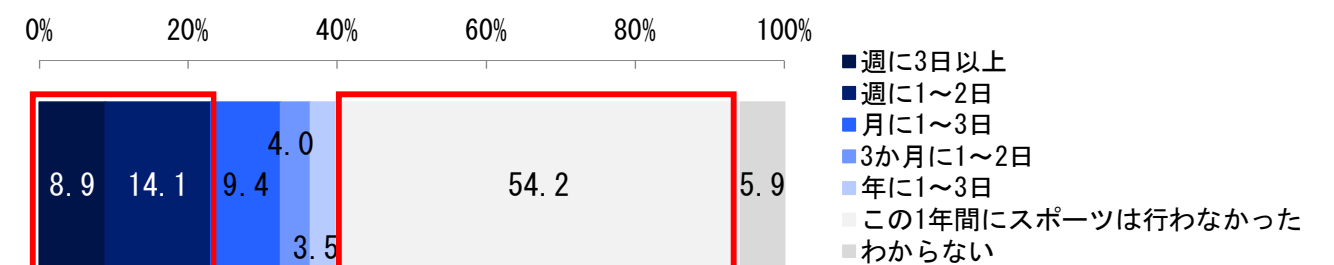
【年代別の比較】



【性別、前回調査との比較】



・県内在住の障害のある方の週に1日以上スポーツ実施率は23.0%と、全国値(31.0%、成人のみ)を下回っている。また、「この1年間にスポーツは行わなかった」は54.2%(全国値は41.3%(成人のみ))と、半数を超えている。



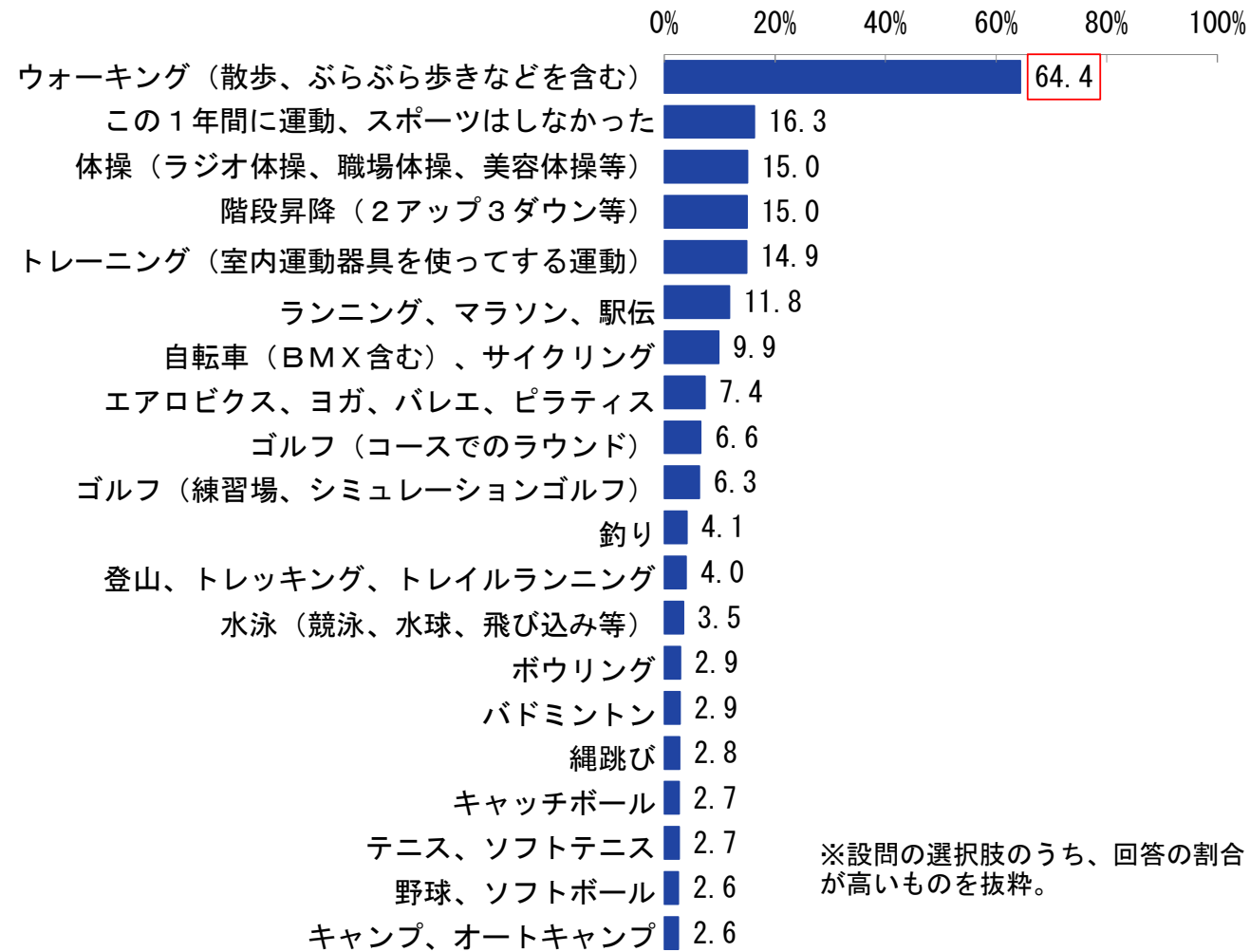
スポーツの実施頻度

次期愛知県スポーツ推進計画基礎調査 概要

【調査① 県内在住の方へのアンケート調査】の結果概要

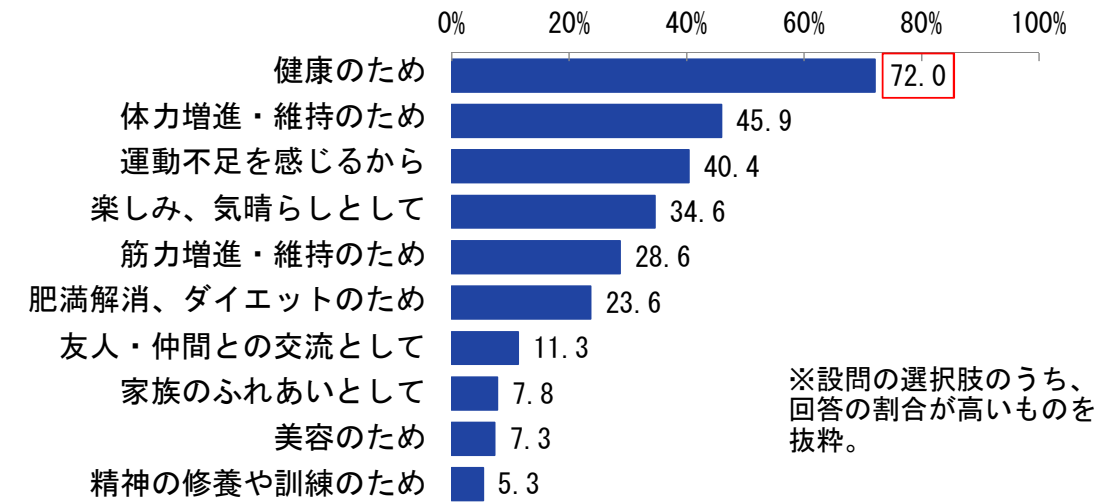
この1年間に行った運動・スポーツ

- ・「ウォーキング」(64.4%)が突出しており、「この1年間に運動、スポーツはしなかった」(16.3%)が続く。
- ・その他割合が高いものとして、「体操(ラジオ体操、職場体操、美容体操等)」(15.0%)、「階段昇降(2アップ3ダウン等)」(15.0%)、「トレーニング(室内運動器具を使ってする運動)」(14.9%)があり、個人で実施可能な種目が上位となっている。



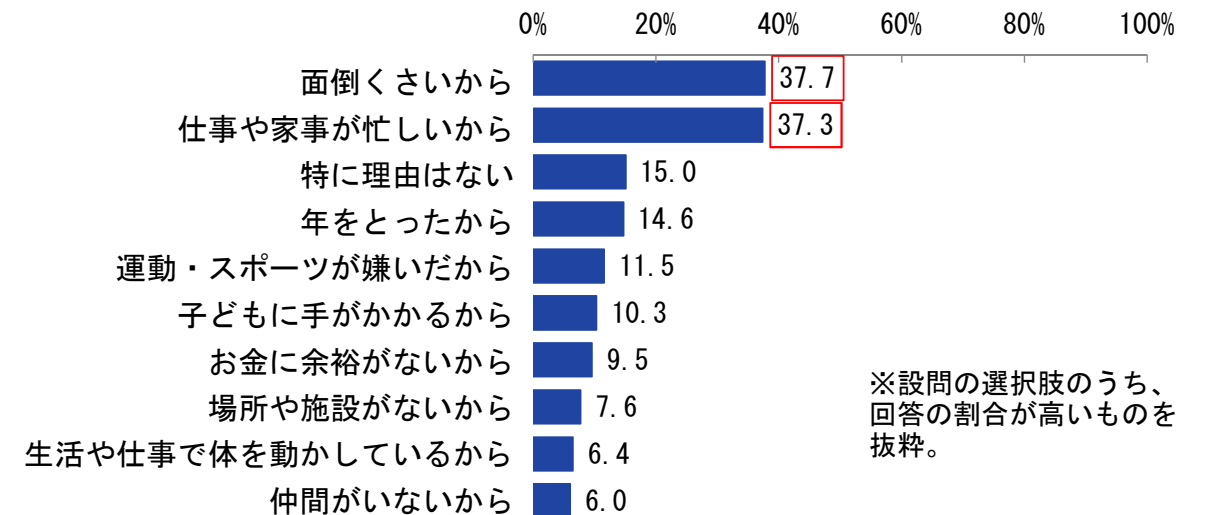
運動・スポーツを行った理由

- ・「健康のため」が72.0%と突出しており、「体力増進・維持のため」(45.9%)、「運動不足を感じるから」(40.4%)、「楽しみ、気晴らしとして」(34.6%)が続く。



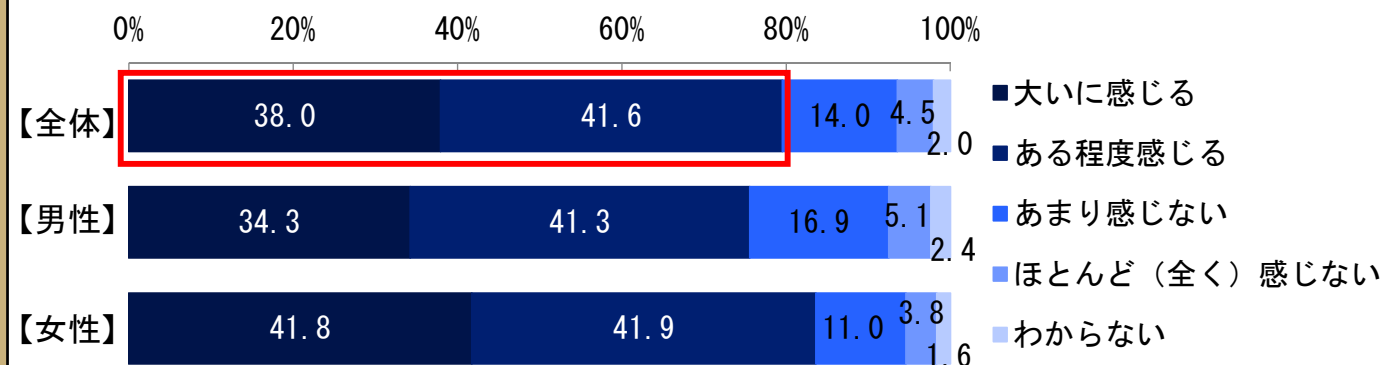
週に1日以上スポーツを実施できなかった理由

- ・スポーツの実施頻度が週1回未満である者に対し、その理由を確認したところ、「面倒くさいから」が37.7%、「仕事や家事が忙しいから」が37.3%と突出している。
- ・次いで「特に理由はない」(15.0%)、「年をとったから」(14.6%)、「運動・スポーツが嫌いだから」(11.5%)となっている。



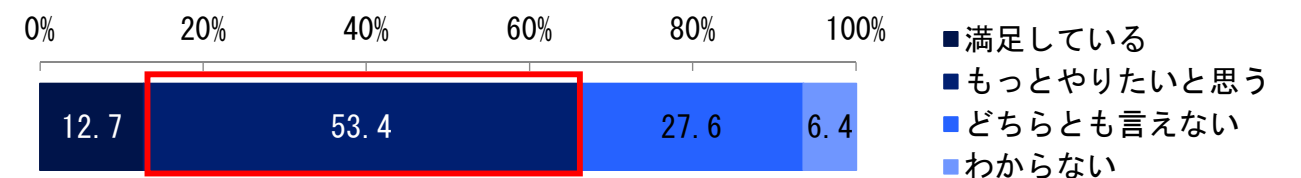
運動不足を感じるか

- ・「大いに感じる」、「ある程度感じる」の割合を合わせると79.6%と、約8割の方が運動不足を感じている。
- ・性別では、女性の方が運動不足を感じている割合が高い。



実施頻度に満足しているか

- ・運動・スポーツの実施頻度に「満足している」の割合は12.7%に留まるものの、「もっとやりたいと思う」(53.4%)は半数以上と、運動・スポーツに対する高い意欲が窺える。



次期愛知県スポーツ推進計画基礎調査 概要

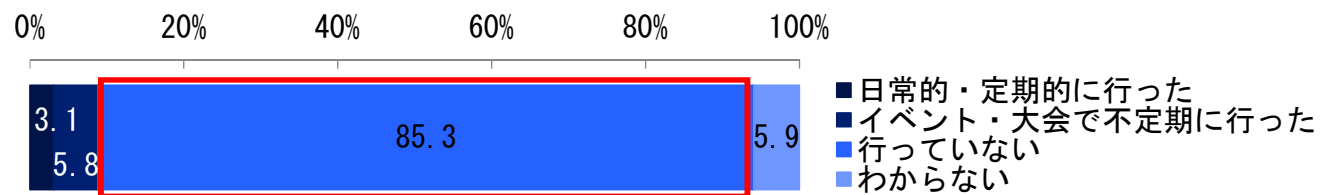
【調査① 県内在住の方へのアンケート調査】の結果概要

スポーツボランティアの活動歴・関心

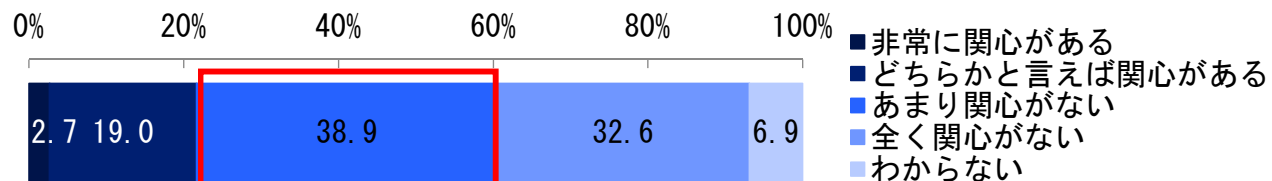
・この1年間のスポーツボランティアの活動歴については、「行っていない」の割合が85.3%と大半を占める。一方、「日常的・定期的に行った」は3.1%、「イベント・大会で不定期に行った」は5.8%と、ボランティア活動歴がある者の割合は1割に満たない。

・スポーツボランティアへの関心については、「あまり関心がない」の割合が38.9%と最も高く、次いで「全く関心がない」(32.6%)が続く。「非常に関心がある」は2.7%、「どちらかと言えば関心がある」は19.0%と、関心がある層は2割程度である。

【この1年間にスポーツに関するボランティア活動を行ったか】

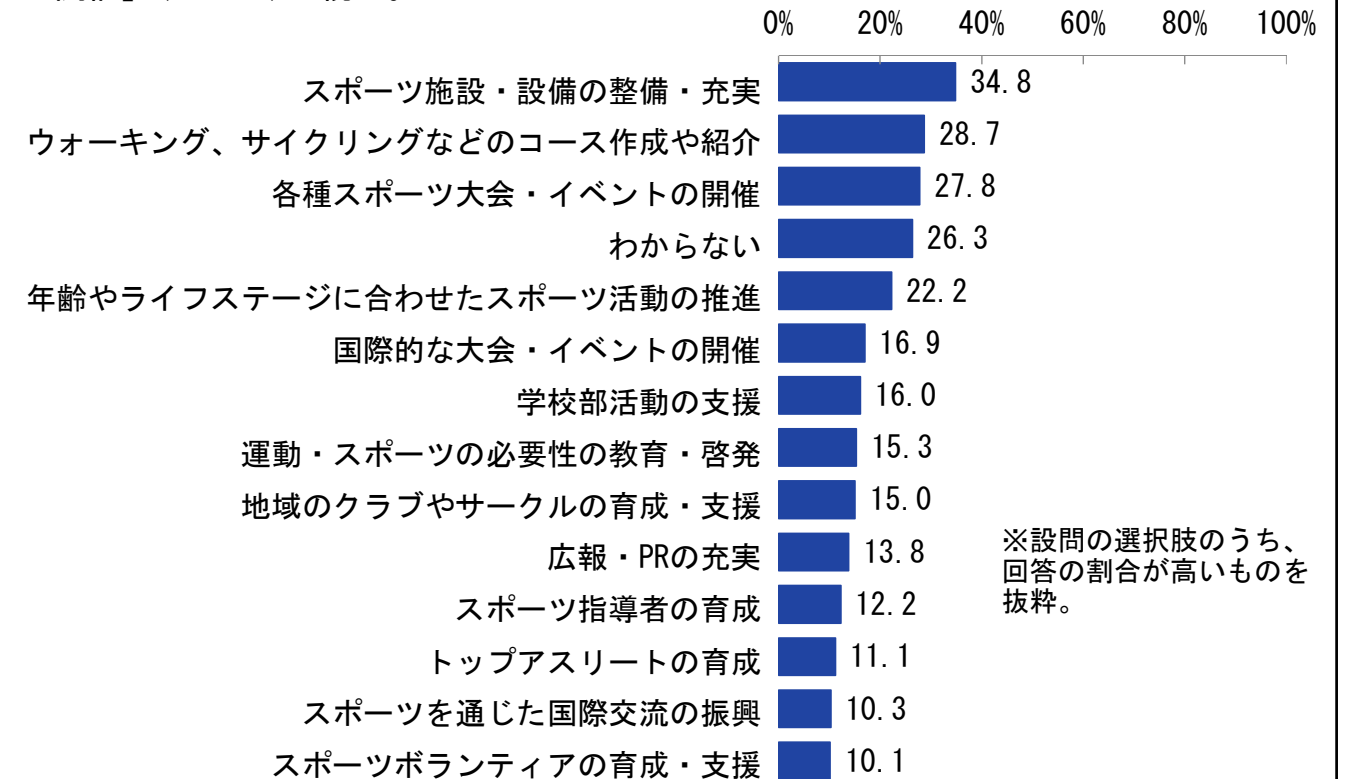


【スポーツに関するボランティア活動に関心があるか】



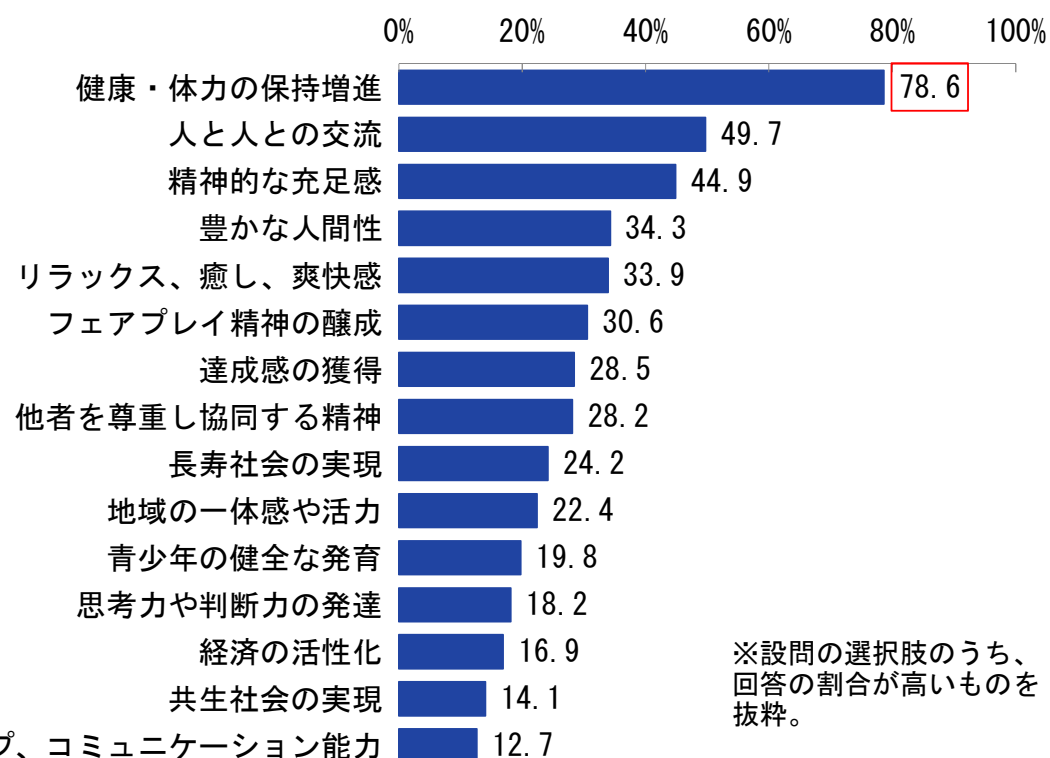
スポーツ振興に向けて行政に期待すること

・「スポーツ施設・設備の整備・充実」(34.8%)の割合が最も高く、次いで「ウォーキング、サイクリングなどのコース作成や紹介」(28.7%)、「各種スポーツ大会・イベントの開催」(27.8%)が続く。



スポーツが個人や社会にもたらす効果

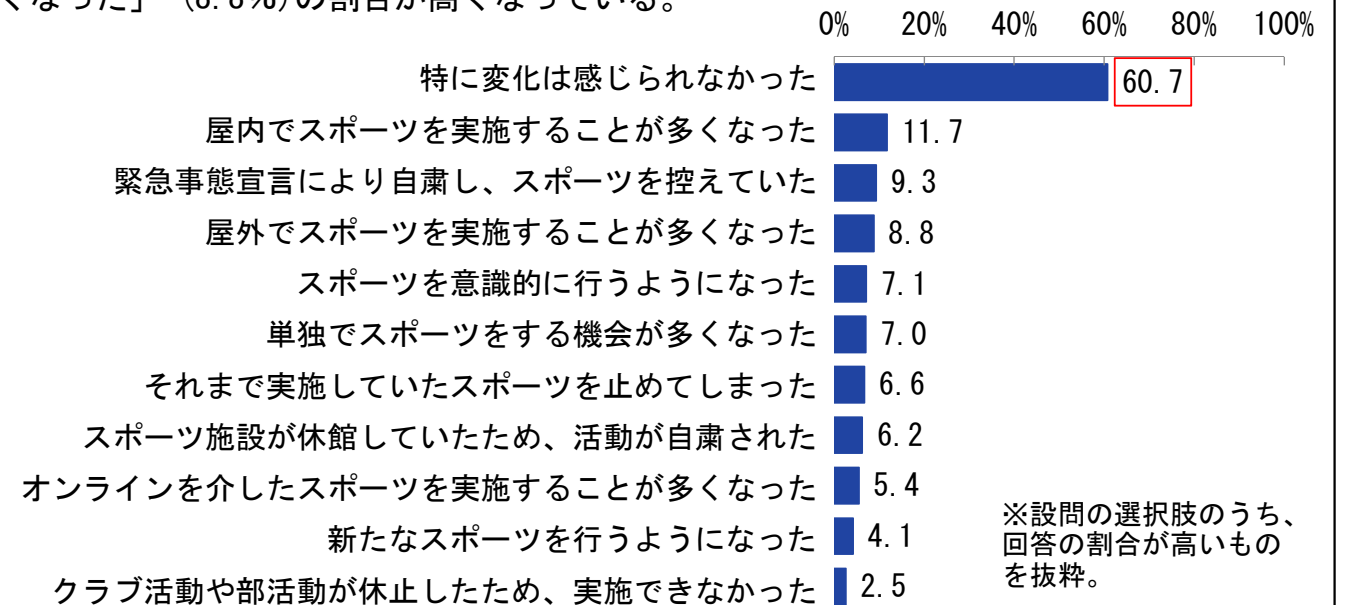
・「健康・体力の保持増進」の割合が最も高く78.6%となっている。次いで「人と人との交流」(49.7%)、「精神的な充足感」(44.9%)、「豊かな人間性」(34.3%)、「リラックス、癒し、爽快感」(33.9%)となっている。



スポーツを実施する環境の変化

・この1年間のスポーツを実施する環境の変化を確認したところ、「特に変化は感じられなかった」の割合が60.7%と突出している。

・続いて、「屋内でスポーツをすることが多くなった」(11.7%)、「緊急事態宣言により自粛し、スポーツを控えていた」(9.3%)、「屋外でスポーツを実施することが多くなった」(8.8%)の割合が高くなっている。

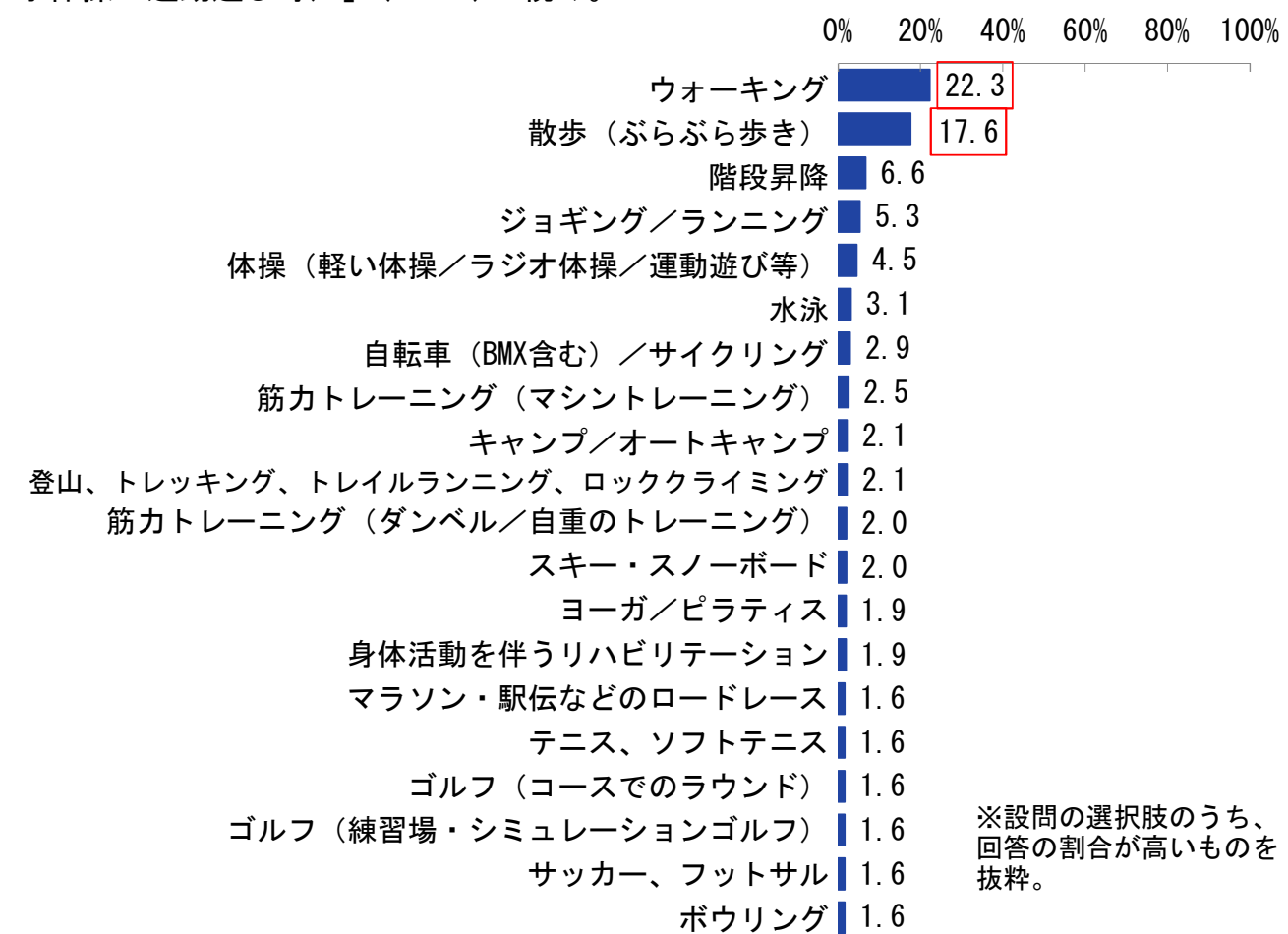


次期愛知県スポーツ推進計画基礎調査 概要

【調査① 県内在住の障害のある方へのアンケート調査】の結果概要

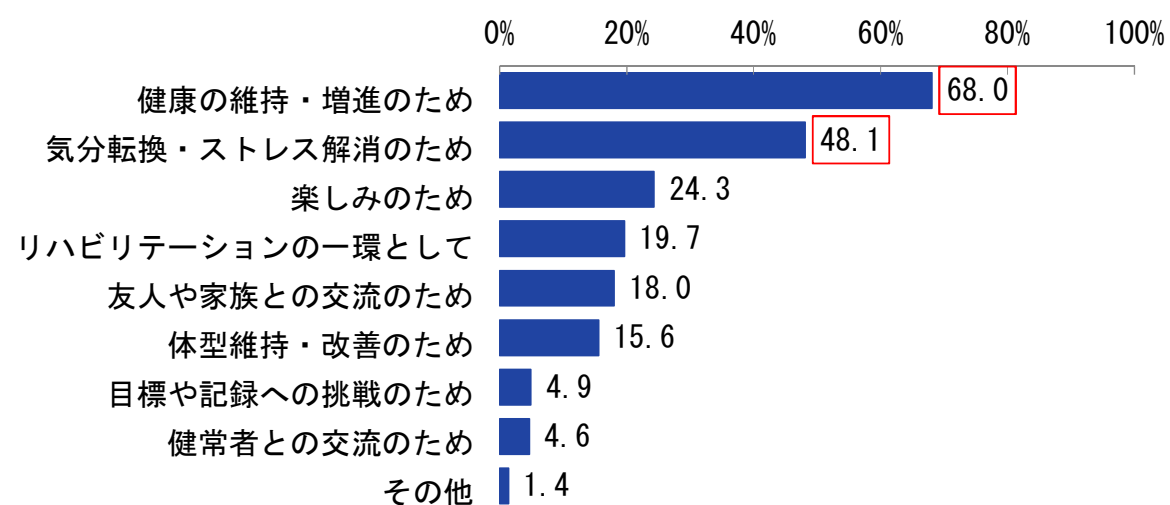
この1年間に行ったスポーツ・レクリエーション

・「ウォーキング」(22.3%)と「散歩(ぶらぶら歩き)」(17.6%)が突出しており、「階段昇降」(6.6%)、「ジョギング/ランニング」(5.3%)、「体操(軽い体操/ラジオ体操/運動遊び等)」(4.5%)が続く。



スポーツを実施する目的

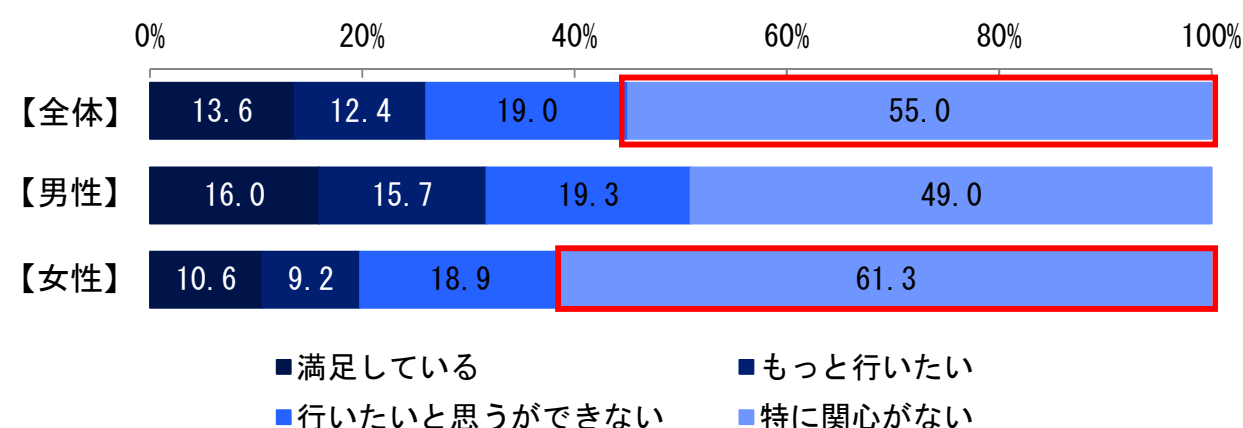
・「健康の維持・増進のため」(68.0%)と「気分転換・ストレス解消のため」(48.1%)が突出している。続いて「楽しみのため」(24.3%)、「リハビリテーションの一環として」(19.7%)、「友人や家族との交流のため」(18.0%)が上位となっている。



実施頻度への満足度

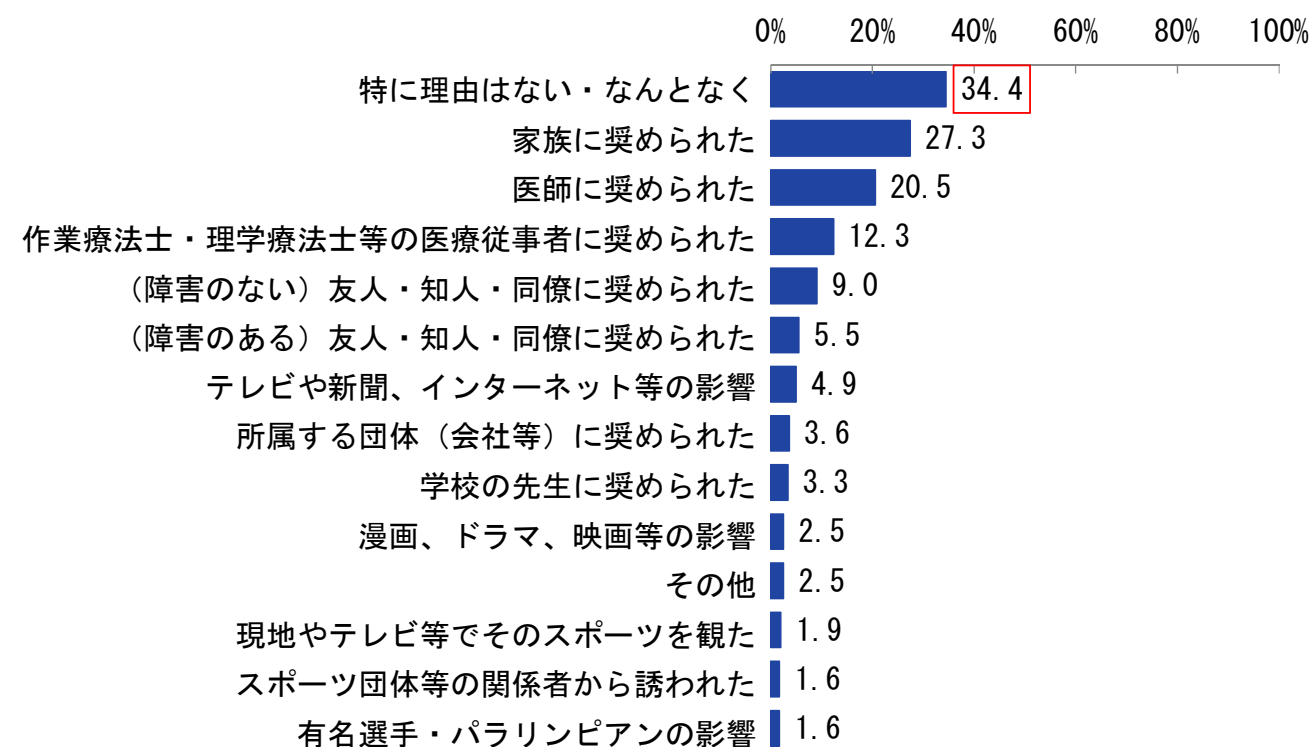
・全体を見ると、「特に関心がない」が55.0%と突出している。「行いたいと思うができない」は19.0%、「満足している」が13.6%と続き、「もっと行いたい」は12.4%に留まっている。

性別では、「満足している」、「もっと行いたい」は男性が、「特に関心がない」は女性が大きく上回っている。



スポーツを始めたきっかけ

・「特に理由はない・なんとなく」が34.4%と最も割合が高く、「家族に奨められた」(27.3%)、「医師に奨められた」(20.5%)、「作業療法士・理学療法士等の医療従事者に奨められた」(12.3%)が続く。

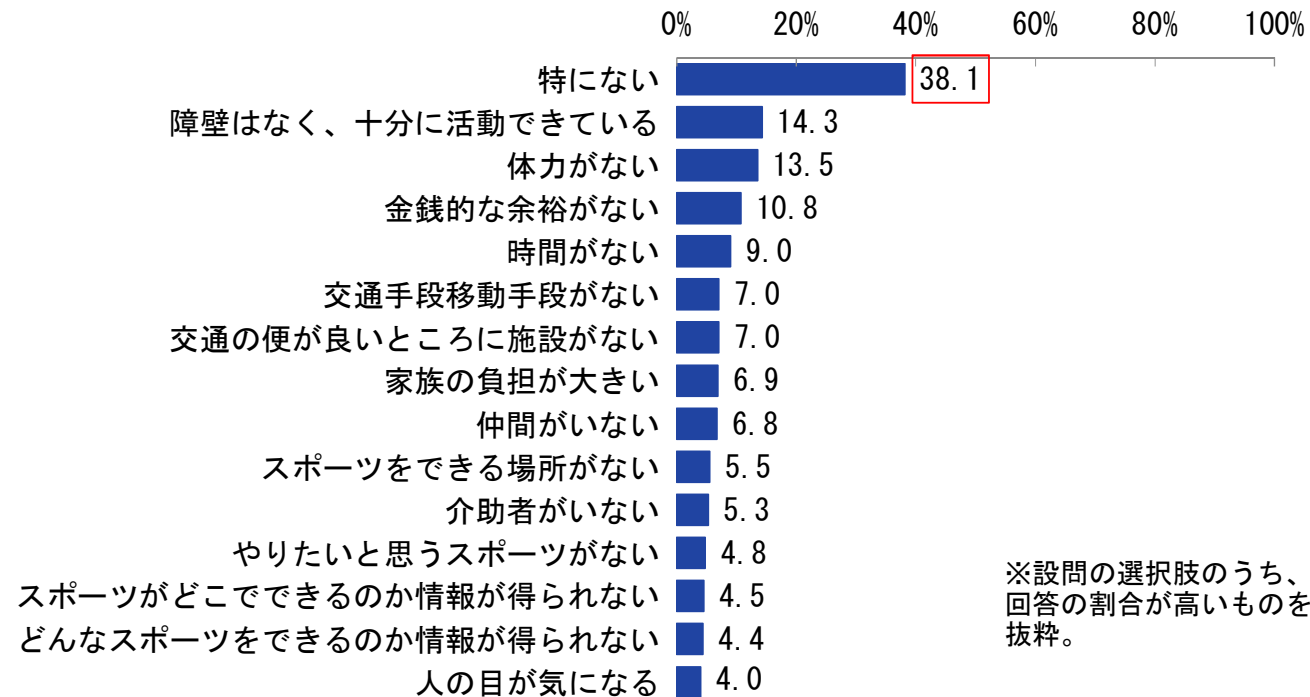


次期愛知県スポーツ推進計画基礎調査 概要

【調査① 県内在住の障害のある方へのアンケート調査】の結果概要

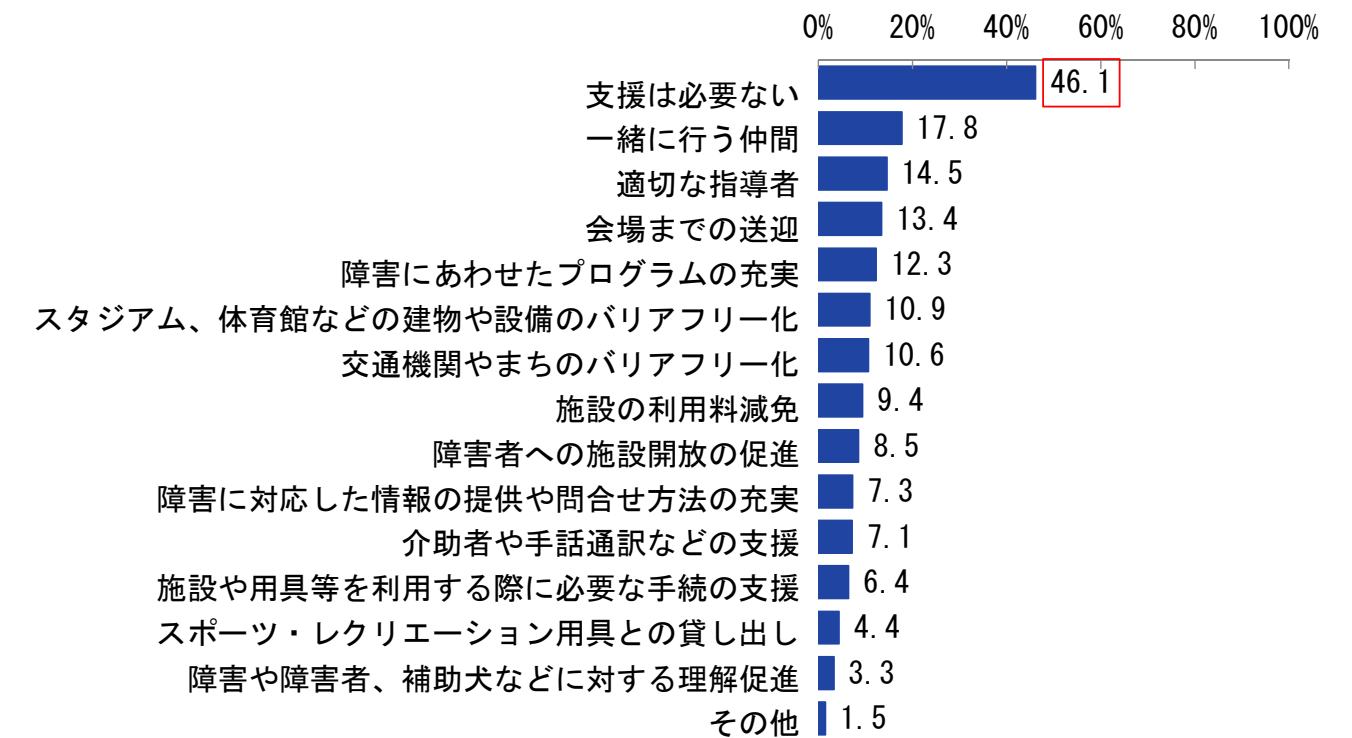
スポーツを実施する上での障壁

・「特にない」(38.1%)が突出しており 次いで「障壁はなく、十分に活動できている」(14.3%)の割合が高いが、それ以外では「体力がない」(13.5%)、「金銭的な余裕がない」(10.8%)といった項目の割合が高い。



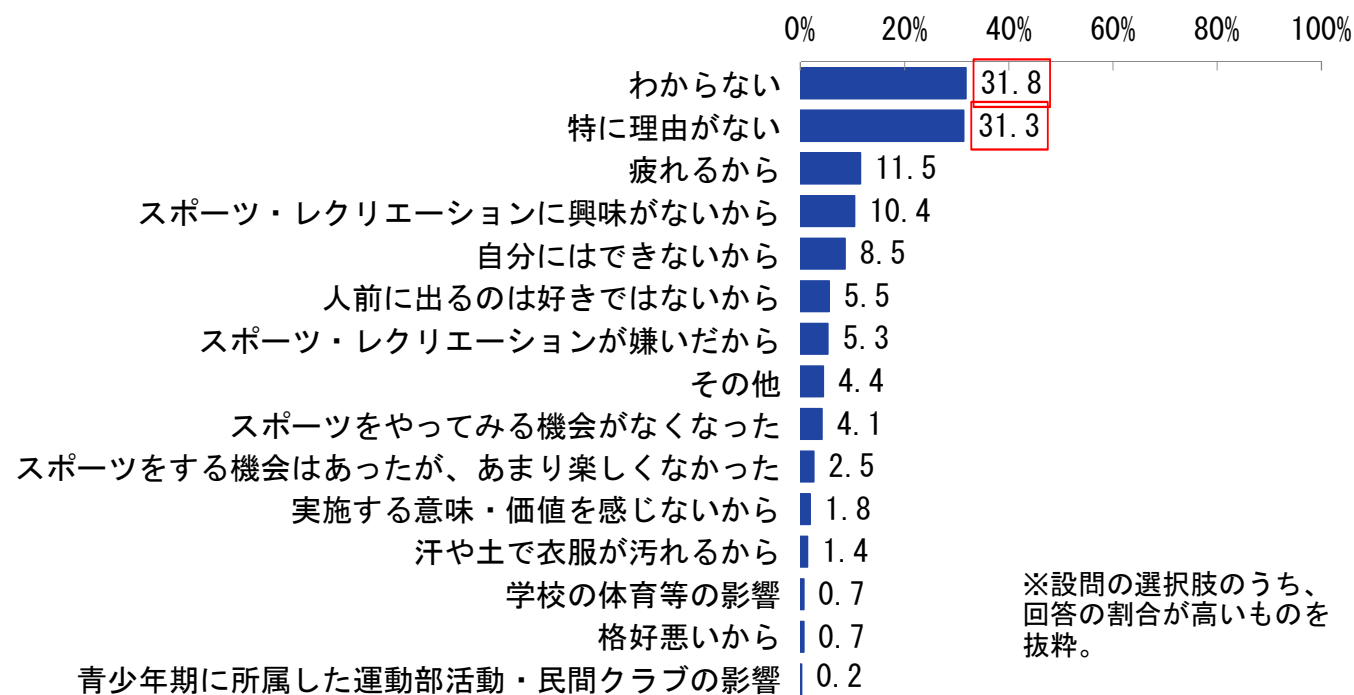
スポーツを実施する上で必要な支援

・「支援は必要ない」が46.1%と突出しており、「一緒に行く仲間」(17.8%)、「適切な指導者」(14.5%)、「会場までの送迎」(13.4%)が続く。



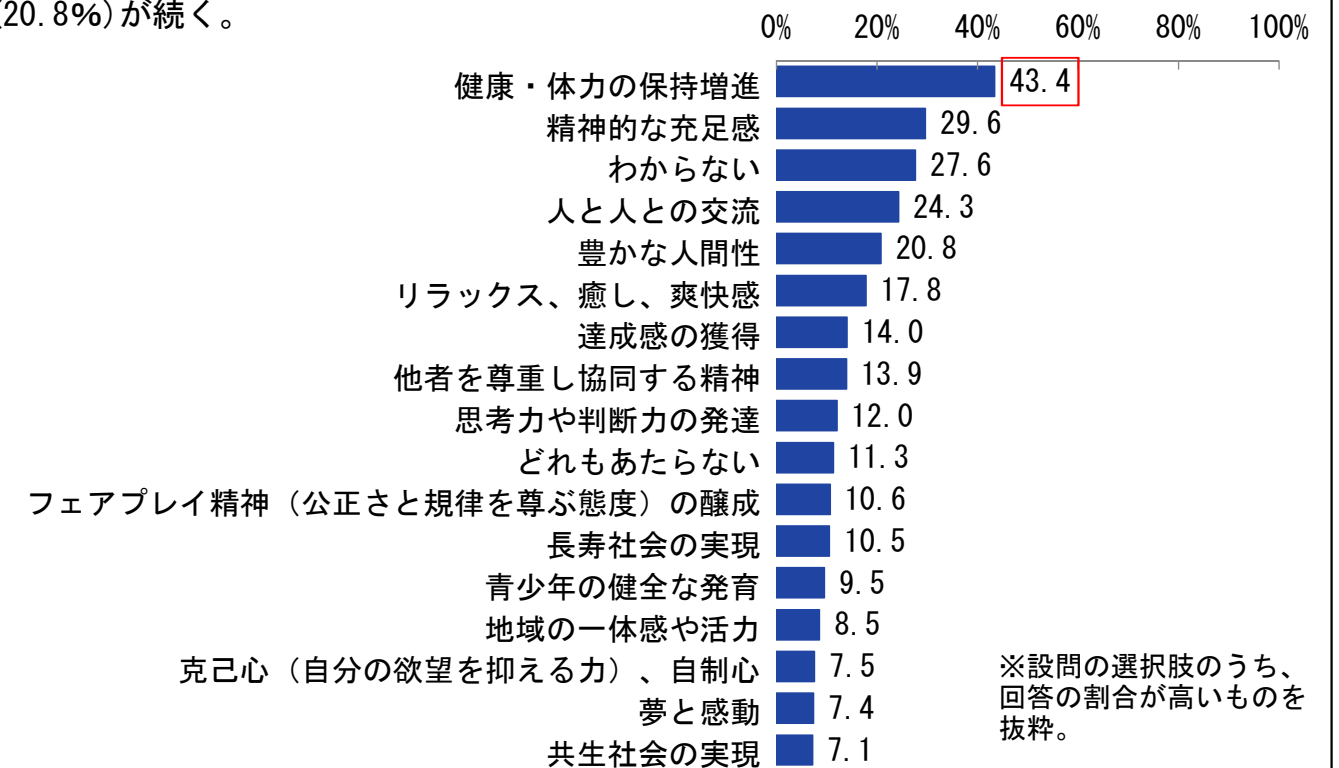
スポーツを実施しない理由

・この1年間にスポーツを実施しなかった者に対し、その理由を確認したところ、「わからない」(31.8%)、「特に理由がない」(31.3%)の割合が高い。
 ・続いて「疲れるから」(11.5%)、「スポーツ・レクリエーションに興味がないから」(10.4%)、「自分にはできないから」(8.5%)となっている。



スポーツが個人や社会にもたらす効果

・「健康・体力の保持増進」の割合が43.4%と突出している。次いで「精神的な充足感」(29.6%)、「わからない」(27.6%)、「人と人との交流」(24.3%)、「豊かな人間性」(20.8%)が続く。



次期愛知県スポーツ推進計画基礎調査 概要

【調査② 有識者等へのヒアリング調査】の結果概要

【地方スポーツ推進計画】

○地方スポーツ推進計画は、スポーツ庁の計画に準ずることも重要であるが、全体の考え方を踏襲した上でオリジナリティが出せると良い。県独自の数値目標等を検討することも必要

【スポーツ実施率】

○現在スポーツに関心が無い人に対して声を届けることは難しい。他の分野のイベントと連携することなど、スポーツの場に引き寄せよう様々なアプローチを試みる事が重要

【学校教育】

○子どもの体育嫌いは小学校から始まる。学校の体育を通じて劣等感を感じると、スポーツをしない人生となり、スポーツ離れに繋がってしまう。そのためにも、小学校にしっかりと体育を教えられる人材を配置することが大切

【競技力向上】

○選手だけではなく、指導者を含めてオール愛知の視点で、学校やクラブの垣根を越えて愛知県のスポーツをより強くするための練習や交流などの取組を行うことができれば、スポーツの普及、また強化にもつながる

【アジア競技大会】

○県民に対する啓発はもちろんだが、選手に対する啓発も重要である。大会を通じて触れ合った選手が活躍することで県民のスポーツに対する意識は高まると思う。そのため、選手の社会活動への参画の促進が必要

【スポーツツーリズム】

○参加費に対してどれだけ満足感が得られるかも大切なポイントになる。参加費に対し、イベントそのもの、食事やお土産など含めそれだけの価値を感じられるかどうか

○大会そのものだけでなく、練習にきたり、友達や家族を誘ってきたりと日常的に訪れるケースもあるため、その点にも結びつくようアピールできると良い

【共生社会】

○施設にアクセスができる人とできない人とでスポーツ環境に格差が生じている。多様な主体のスポーツ参加を促すには、誰もがアクセスできる環境を整えていくことが重要

○スポーツを通じてコミュニティづくりができることは、スポーツの副次的効果の一つであると思う。スポーツを通じて地域防災をはじめ、高齢者や外国籍の方との共生につながれば良い

【スポーツボランティア】

○継続的にイベントを呼び込みボランティアの機会を創出し続けることで、スキルの維持やモチベーションの向上を図る必要がある。様々な種目、異なる質のボランティア活動が出来れば、“ささえる”スポーツに関わる人にとってやりがいとなる

【スポーツの価値】

○スポーツは触媒的な価値があると考えている。スポーツそのものを目的にすることも大切だが、スポーツを使って社会を発展させることが今の時代は求められている

【調査③ スポーツに関する団体、施設等へのヒアリング調査】の結果概要

【スポーツ実施率】

○競技的なスポーツだけではなく、スポーツを幅広く捉える形で、県として取り組んでいただきたい。ウォーキングや体操など、気軽に身体を動かすこともスポーツであると打ち出すことで、「これならできそうだ」「やってみようかな」という気持ちにつながるのではないかと

【地域スポーツ】

○どのようなスポーツクラブにしたいのかを地域ごとに判断し、展開してもらい形が良いだろう。地域住民が主体的に関わり、その地域のスポーツクラブの在り方を決めていくプロセスが求められる

【大学スポーツ】

○大学としては、資金面等で支えていただきたいという思いはあるが、逆に大学の資源（人や施設）をどのように活用できるかを検討していく必要がある

【新技術の活用】

○スポーツ観戦については、ライブ感を味わわせることが重要かと思う。新技術を活用することでそれが実現しやすくなっていくと思う。スポーツの魅力を感じることができれば、“する”スポーツにつながっていくのではないかと

【アジア大会】

○アジア競技大会を活用して、水素バスの運行や観光MaaS等、新技術のショーケースとすることができるとよい。関心を示す企業もあるのではないかと

【スポーツツーリズム】

○スポーツツーリズムは目的旅行であるため、目的（そこに行く理由）やモチベーションを作り出さなければいけない。例えばマラソン大会であれば、今後生き残っていくためには景色やホスピタリティといった要素がこれまで以上に求められることになるだろう

【アーバンスポーツ】

○アーバンスポーツをする場所があれば、例えば公共空間でスケボーをすることで生じている負のイメージも払拭できる。オリンピック選手の輩出にも繋がるかもしれない。また、都市の魅力向上にも繋がる

【共生社会】

○地域に健常者と障がい者が一緒に活動する拠点がないことが課題である。もっと身近なところで健常者を含めた交流活動やレクリエーションに取り組むべきだが、現状そのような場がない。そのような場づくりが、スポーツの普及・振興の土台になる

○障がい者スポーツについては、学校を卒業した後に継続できないケースが多いことが非常に残念である。卒業した後、競技を行う場がなく途絶えてしまう

【スポーツ施設】

○アジア競技大会に向けて、スポーツホスピタリティを高められる施設があると良い

【スポーツボランティア】

○応援してくれる方は多いと思うため、いかにきっかけを作り、いかにモチベーションを維持していくのが重要である。東京オリパラの直後であり、またアジア競技大会も控えているため、モチベーションにつながる